

災害時，患者の安全を確保するために ～新採用看護職者の教育方法の検討～

高松赤十字病院 看護部

大西 力，土居 大剛，松原 由美

要 旨

高松赤十字病院では，災害時に患者の安全を確保できる看護職を育成するために，研修や訓練を実施している。新採用看護職者は，毎年6月の防火避難訓練に救援者として参加し，患者を安全に避難させる方法を学ぶ機会を持っている。看護職者の災害に関する教育を担当している看護部災害救護委員会は，実践能力の習得につながるような教育が必要であると考え研修内容の見直しを進めてきた。平成22年度は看護部ハンドブックに記載された内容を讀んだだけの状態で避難訓練に臨んでいたが，平成23年度から毎年見直しを進め演習やシミュレーションを取り入れた研修を行なってきた。演習やシミュレーションを取り入れた研修を行うことで，災害時対応のイメージ化を促し災害時に患者の安全を確保するための知識・技術の取得に繋がっており効果的だったと考えられる。新採用者の教育に実践を交えた方法は有効であった。

キーワード

新採用者，災害看護教育，避難訓練

はじめに

高松赤十字病院では，災害時に患者の安全を確保できる看護職を育成するために，研修や訓練を実施している。新採用看護職者（以下，新採用者と略す）は，毎年6月の防火避難訓練（以下，訓練と略す）に救援者として参加し，患者を安全に避難させる方法を学ぶ機会を持っている。各配属部署で事前に訓練に必要な救援方法を説明された後，訓練に参加しているが，実際の訓練中には，何も出来ずに立ち尽くしてしまい，行動できない姿が目立っていた。

看護職者の災害に関する教育を担当している看護部災害救護委員会（以下，委員会と略す）では，新採用者に対して災害時の実践能力の習得につながるような教育が必要であると考え，新採用者対象の訓練の機会を通して研修内容の見直しを繰り返し進めてきた。その見直しの経過とともに研修内容の充実が図られてきたので報告する。

対象・方法

1. 期間：平成22年～平成27年
2. 対象：新採用者
3. 方法：取り組みの過程
 - 1) 平成22年 訓練後のアンケート調査の実施
訓練内容を見直す
 - 2) 平成23年 訓練の場で看護部災害救護委員（以後，委員と略す）が新採用者に教えながら患者を避難させる
訓練後のアンケート調査の実施
訓練内容を見直す
 - 3) 平成24・25・26年 2)の方法で訓練を実施した後，追加演習を実施する
訓練後のアンケート調査の実施
訓練内容を見直す
 - 4) 平成27年 追加演習前後で内容理解度の調査を実施

4. 倫理的配慮

研究を実施するに当たり所属施設の倫理委員会の承認を得た。

結 果

新採用者は、平成22年までは各セクション(病棟)で委員から避難訓練のオリエンテーションを受け、看護部ハンドブックに記載された内容(災害看護に関する項)を読んだだけの状態で訓練に臨んでいた。訓練後のアンケート結果(表1)では、看護部ハンドブックに記載された内容(災害看護に関する項)を読み、委員からのオリエンテーションを受けただけの状態では、救援者とし

表1 平成22年度までのアンケート結果

- ・担架の取り扱いに関して、担架の使い方がわからない。
担架を開くのに時間がかかる。
担架で階段が降りられない。
歩調がバラバラだった。
- ・点滴チューブの取り扱いに時間がかかった。
- ・声かけが不十分で動きにくかった。
- ・新人には指導係の方がわかりやすい。



図1 訓練中の様子 担送①



図2 訓練中の様子 担送②

での行動が不十分であった。そこで委員会では訓練後のアンケート結果より訓練内容の見直しを行った。

平成23年から、訓練の時に、委員が新採用者に救護の方法を指導しながら患者を避難させる方法で、新採用者の教育を行うようにした。それには、まず委員の中で救援行動の共通理解を行った。担架担当の委員を決めて担架での避難時の注意点をその場で教えるようにした。護送の患者の避難では、見本をみせ同じように行動させた(図1～図4)。訓練後のアンケートでは、委員の直接指導が効果的である内容がみられた(表2)。委員からは、訓練中に教えるのは、「時間を気にするので十分に教えられない。」という意見が聞かれた。

訓練後のアンケート結果より委員会では、さらに訓練内容の見直しを行った。平成24・25・26年は、平成23年と同様に訓練中に指導しながら避難を行い、訓練終了後に10名程度のグループに分かれて3種類の演習(演習①は消火器等の取り扱い、演習②は非常階段の使用法、演習③は担架等の取り扱い方)を実施した(図5～



図3 訓練中の様子 護送



図4 訓練中の様子 独歩

表2 平成23年度 アンケート結果

- ・委員が適切な指示を出してくれたので動きやすかった。
- ・適宜、アドバイスを受けることができ点滴やチューブ類を適切に取り扱いながら救援できた。
- ・担架で階段を降りる時にスピードや高さなどの声かけをし合いながら協力できた。
- ・担架の組み立てに時間がかかった。
- ・何度も練習を行い、もっとスムーズに安全に患者の避難が行えるようになりたい。
- ・階段移動や滑り台を使った患者の避難、移送の訓練をしたい。
- ・病室から患者を運び出すのに時間がかかった。



図5 追加演習Ⅰ 消火器の取り扱い



図6 追加演習Ⅰ 消火栓の取り扱い



図7 追加演習Ⅱ 非常階段での避難①



図8 追加演習Ⅱ 非常階段での避難②



図9 追加演習Ⅱ 非常階段での避難③



図10 追加演習Ⅲ 担架の取り扱い①



図11 追加演習Ⅲ 担架の取り扱い②



図 12 追加演習Ⅲ 毛布を使った移送

表 3 平成 24～26 年度 アンケート結果

- ・実技演習がわかりやすかった。
- ・今回の訓練で担架や階段移送について学べたので、次回はすすんで救援活動を行いたい。
- ・他の看護師との連携をもっとしっかりととり、患者の安全に配慮したい。
- ・担架で降りるのは、実際にしてみないとどんな感じかわからなかったのですごく勉強になった。一人ひとりの位置もすごく重要になると感じた。非常階段で降りるのも一番前・患者・一番後ろと全部体験できたので実際に避難するときに自分がどうすれば患者を安全に避難させられるかを考えることができた。

図 12)．平成 23 年のアンケート結果を踏まえて避難方法に不安がある担架の取り扱いや、訓練では実際に使用しない消火器・消火栓の使用、非常階段を使った避難の演習を中心に追加した。訓練中の指導では、救援した患者の移送に関する注意点しか聞くことができないが、演習時間を追加す

ることで訓練中に教えられなかった点を参加した新採用者全員に説明できる機会となった。訓練後のアンケート結果では、普段触ることのない器具である消火器・消火栓の取り扱い、また非常階段も普段使用することがないので、貴重な経験となっている(表 3)。担架やポーターマットの取り扱い、シーツや毛布を使った救援者 1 名での移送では適切、安全な方法を学ぶことができた。担架以外の移送方法を体験することで今後の救援活動に生かしていける。

平成 24・25・26 年の追加訓練実施における、参加した新採用者の理解度の把握ができていないため、追加訓練が本当に実践能力向上に寄与しているかを確認する必要があると考え、平成 27 年には、訓練中に指導しながら避難を行ったあと、10 名程度のグループに分かれて 3 種類の追加訓練を実施するとともに、その前後での理解度調査を実施した。理解度調査は、平成 27 年は防火避難訓練に参加した新採用者 27 名全員(男性 3 名、女性 24 名)を対象に実施した。その結果、追加訓練後では、すべての項目で「できない」と答えた新採用者はいなかった。追加訓練後は、消火器・非常階段・担架の項目で「できる」が 70%以上であった。特に、消火器の取り扱い・担架の取り扱いの項目では「できる」が 90%以上であった。救援時の装備・タイミングに関しても訓練後では「できる」の割合が増加している。(図 13～図 18) また救援時の持続点滴の扱いは 74.1%が理解できており、救援時の酸素カニューレ等の扱いは 55.6%が理解できていた。

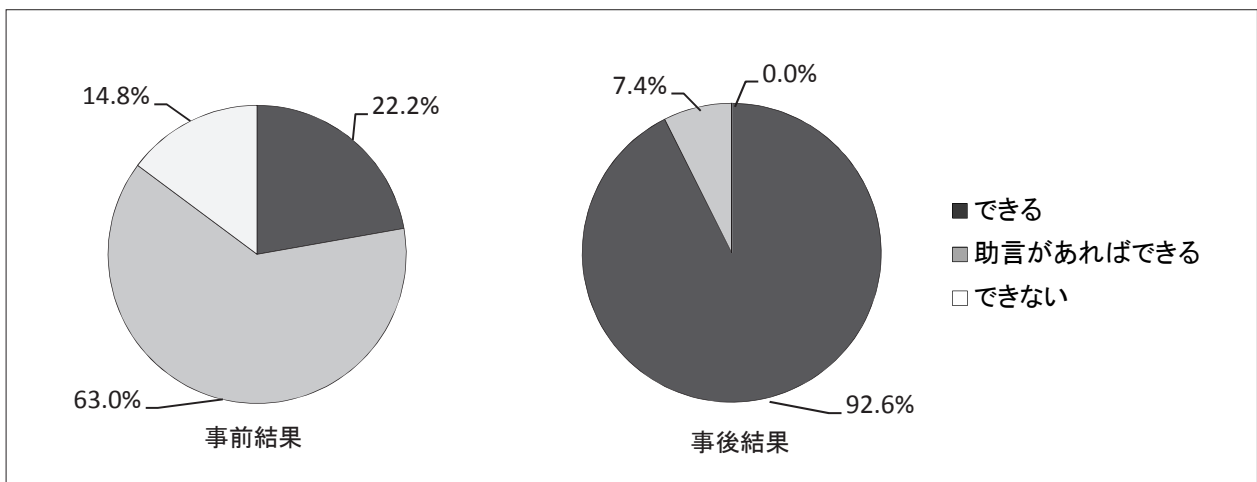


図 13 消火器の取り扱い

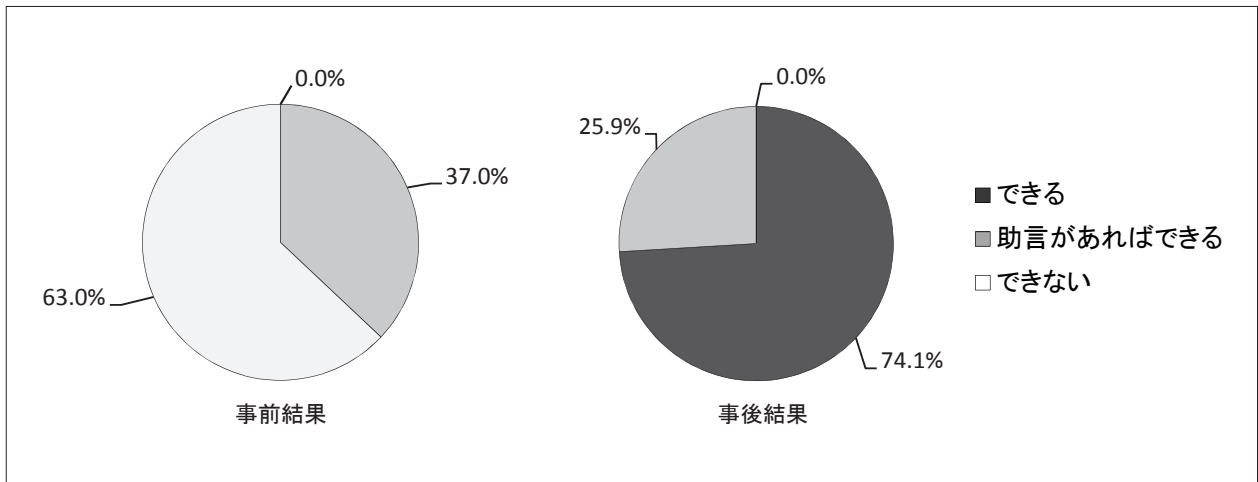


図 14 非常階段の使用状況

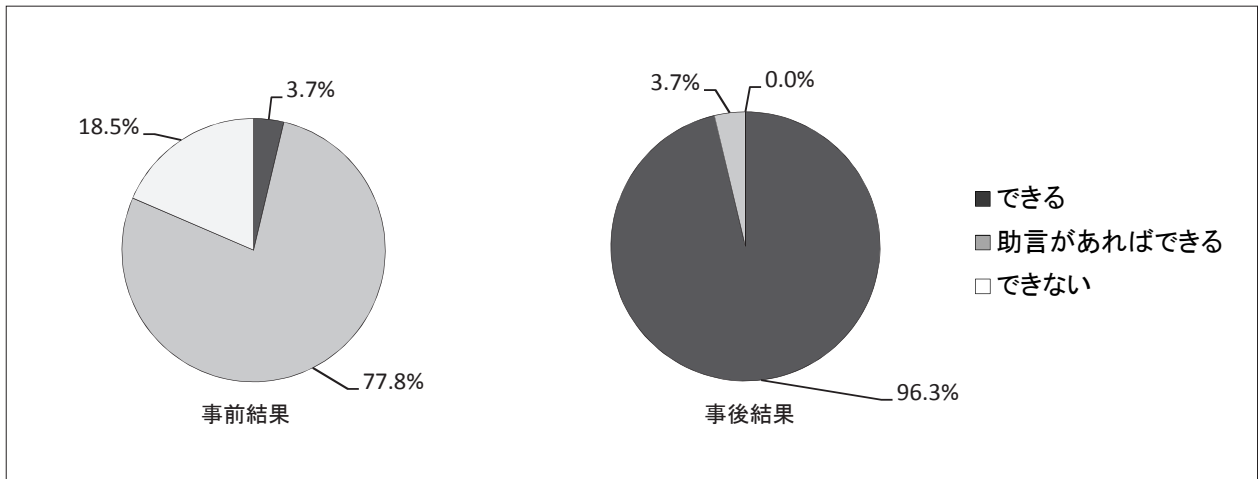


図 15 担架の取り扱い

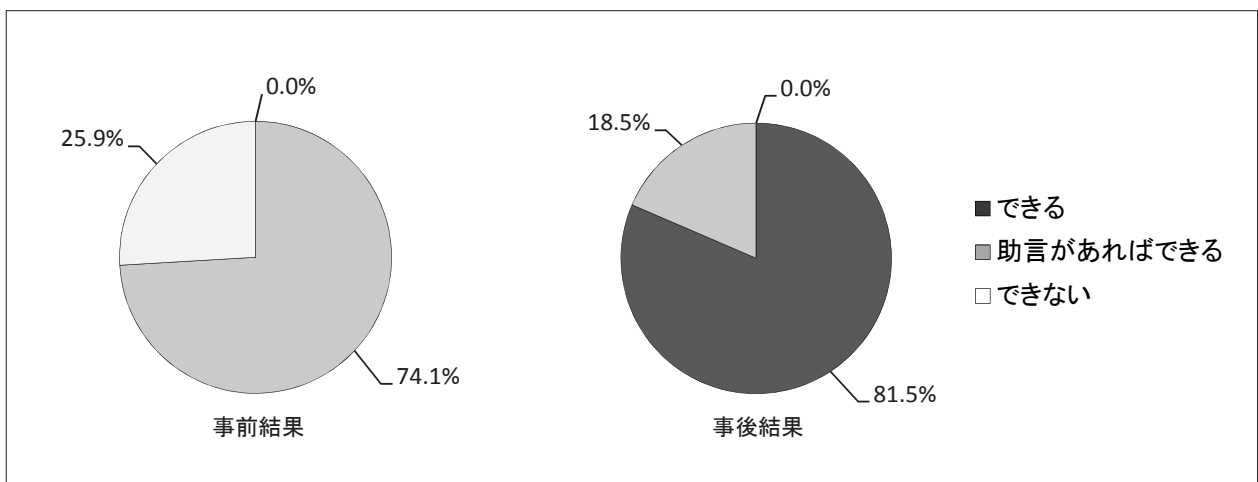


図 16 担架の搬送方法

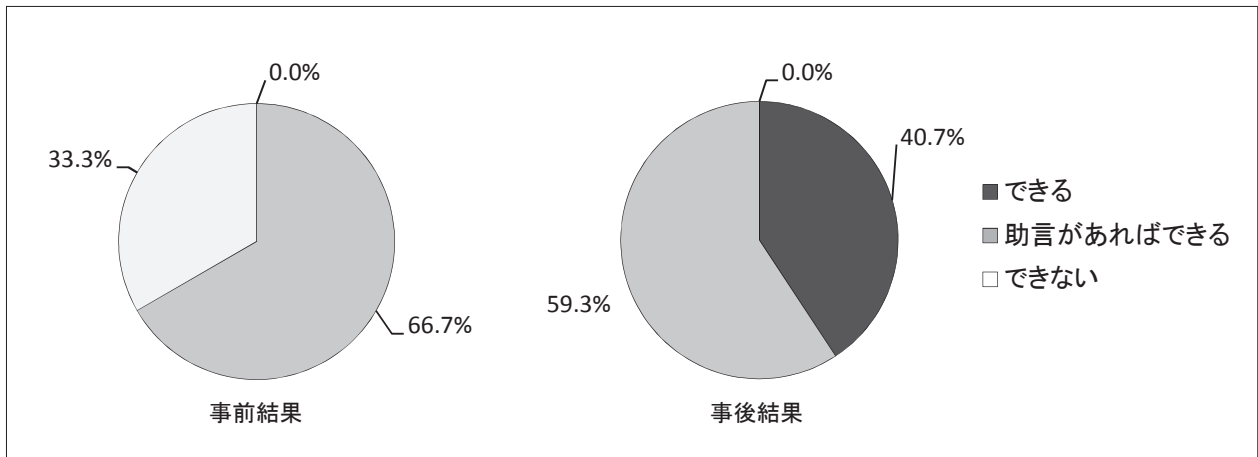


図 17 救援装備

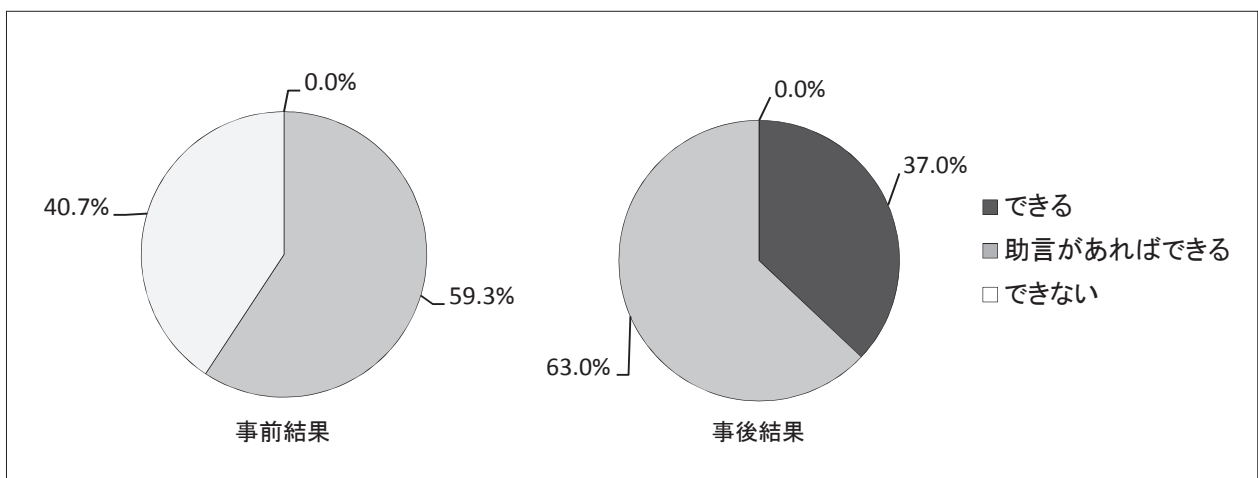


図 18 救援タイミング

考 察

災害とは、予期せぬ出来事が起こる場であり、私たちはそれに対して、冷静に適切な対応を行うことが必要である。しかし、人は予期せぬ出来事に遭遇したときパニックになってしまうことが考えられる。そのためにも訓練を通じて、知識・技術の習得が重要となってくる。南ら¹⁾も、「災害時に発生する混乱状況を統制し、適切に対応するためには、災害に対する備えが必要となる」と述べている。看護職者の災害に関する教育を担当している看護部災害救護委員会は、実践能力の習得につながるような教育が必要であると考え、研修内容の見直しを進めてきた。見直しとともに研修内容の充実が図られてきたと思われる。

阿部ら²⁾は、シミュレーション教育の効果として、「安全な学習環境の中で学習者の行為に現れた失敗から、知識を補い、未熟な行為を熟達へと

転換していく学習過程を経験させることで、臨床での実践力の橋渡しが可能となる」と述べている。訓練中に行われる指導や指示は、根拠をふまえて行動することができる十分な知識、技術の獲得には至らないと思われることから追加訓練実施により訓練中では経験できない知識、技術をより正確、確実に習得してきたと考えられる。また阿部³⁾はシミュレーションでは、「実技中に説明やディスカッションの時間を十分にとることができる」と述べている。アンケート結果からも演習後は理解度が高く、シミュレーションを行い経験しておくことは実践力の向上に重要と考えられる。実際に経験しておかないと知識・技術の習得は難しいため、今後もシミュレーションを取り入れた反復練習を継続し、実際の体験からの学びを重要視していくことが必要と思われる。

今までは、アンケート結果からできていなかった

た事を訓練に追加して行う方向で、教育方法を変更していき、次年度に不足箇所を補う体制で教育方法を検討し改善してきたが、前もってシミュレーションを取り入れた訓練を実施し、新採用者に「できない」と感じる思いや知識・技術不足からおこる不安感の軽減につなげていきたいと考えている。満足感や達成感を得ることができる訓練をおこなうことで参加者自身がプラスの感情を生み出せると思われる。そして次へのステップアップや自分自身の課題を見出し、参加者それぞれが災害救護に関する意識向上を図っていく姿勢をもてるのではないかと思われる。

今回、新採用者における避難訓練の教育内容の検討を行ってきた。演習やシミュレーションを取り入れた研修が患者の安全を確保するために効果的であったと考えられる。訓練中に委員から指導を行うことで新採用者は、適切な指示を受けることができ、また適宜アドバイスを受けることができるためパニックにならず救援活動を行うことができたと思われる。委員のように経験のある指導者がいることで不安や焦りが軽減し混乱状態を統制できていたと考える。

おわりに

新採用者の教育に実践を交えた方法は有効であった。しかし、新採用時だけでなく継続した段階的な教育が必要である。また、教育を担当する委員のスキルアップも必要である。

アンケート結果を踏まえて、今後は、4月の時点で災害オリエンテーションを実施し、事前に机上訓練を行い、次に担架・消火器・らせん階段演習を行ってから避難訓練に臨む体制に変更していきたいと考えている。また、ICU災害訓練を実施し特殊部門での避難方法を経験することや、訓練を通して災害対策意識の向上を図っていくことも必要と考えている。委員が中心となって災害に関する勉強会を企画・立案することで、職員1人1人に災害対策に関する研修会を実施しスタッフ、委員ともにスキルアップを図っていく予定である。実践に生かせる技術、知識の向上を今後も継続して行っていきたいと考えている。

●文献

- 1) 南祐子, 山本あい子編: 災害看護学習テキスト 概論編: 58, 日本看護学会出版会, 東京, 2007.
- 2) 阿部幸恵編: 看護のためのシミュレーション教育:

56-60, 医学書院, 東京, 2013.

- 3) 阿部幸恵: 大学におけるシミュレーション教育. *Journal of Integrated Medicine* 19 (2): 106-109, 2009.
- 4) 太田宗夫編: 災害医療, エマージェンシー・ケア 07年新春増刊: メディカ出版, 大阪, 2007.
- 5) 黒田裕子, 酒井明子: 災害看護 人間の生命と生活を守る: メディカ出版, 大阪, 2004.
- 6) 小原真理子: いのちとこころを救う災害看護: 学研, 東京, 2008.